

ステファヌ・クルトワほか著

共産主義黒書

〈ちくま学芸文庫、ソ連篇、二〇一六年三月、六四〇頁／アジア篇、二〇一七年一月、五七六頁〉

「一窮二白」とは、毛沢東が成立間もない中華人民共和国を評して述べた言葉である。「貧しく、何も無い」からこそ、「白紙」に美しい社会主義の未来を描こうではないかとの呼びかけと、多くの人々が解釈した。しかし、その後中国に起こったことは人権の無視であり、伝統文化の否定であり、社会の国家管理の試みであった。しかも、新たな「身分制度」さえ出現し、それへの批判は許されてこなかった。どうしてそうなったのか。「白紙」の意味は何だったのか。社会主義を掲げてきた世界中の国々がその看板を下ろす中で、アジアの「社会主義」国だけが残っている。共通するのは一党独裁であり、思想信条の自由を基礎とする市民的自由の否定であり、自立した人

格の否定である。

本書は、一九九七年にフランスで出版された原書の日本語訳であり、総計一千頁を超える大著である。上巻のソ連篇では、スターリン主義の源泉がレーニンにあり、そこに対置されることとがしばしばであったトロツキも大同小異であることが、ラーゲリ（政治犯強制収容所）などの事例を挙げながら示される。下巻のアジア篇では「アジア社会主義国」が取り上げられる（訳出に際して、ラテンアメリカとアジアは割愛されている）。中国でも北朝鮮でも、さらにカンボジアやラオスでも「解放」前の世界が階級的ジェノサイドによって清算され、「白紙」状態が作られていったことが説明される。その時動員されたのは、執政党や偶像化された指導者を礼讃し、無批判に従った「労働大衆」「青年男女」であり、彼らが展開したものは暴力と破壊であった。しかし、ひとたびその異常さに気付き、「前衛党」の矛盾を指摘すると排除された。あとに残ったの

は、荒廃して「ディストピア」と化した社会である。本書が挙げたことから、すでに周知のことかもしれない。だが、マルクス主義を宗教イデオロギーのように国是とし、ナシヨナリズム化を進めた「国家」による、無数の犯罪行為、非人間的行為は正視に耐えない。

原書出版のころは、ソ連邦が解体してから十年足らず。しかし、すでにペレストロイカによって一党独裁の「悪行」の数々が露呈し、ロシア革命に遡って、ポリシエビキ・共産党の正当性が揺らぎ、それが世界的に共有されるようになっていた。いつばう中国では、一時的な民主化の可能性の芽が暴力的に摘み取られ、一党独裁のまま経済大国への途を幕進していた。それが「中国の特色を持つ社会主義」である。その後、中国共産党は「赤い資本家」を党員とする中国「国民党」となり、市民的自由を認めることなく経済成長を遂げ、矛盾を抱えて現在に到っている。

（三好章）